

# サンスクリット語における非従属節化<sup>1</sup>

張倩倩

zhangqianqian1011@gmail.com

キーワード：サンスクリット 統語論 非従属節化

## 要旨

本論文では、サンスクリット語における非従属節化現象を考察する。非従属節化(*insubordination*)という概念は Evans (2007: 367) が「慣習化されている、一見して形式的に従属節のように見えるものの主節用法」という定義のもとに提唱した現象である。本論文は叙事詩サンスクリット、サンスクリット劇とヴェーダ文献 *Śatapatha-Brah̥mana* の中でも非従属節化の現象があると主張する。そのうち、叙事詩サンスクリットとサンスクリット劇に見られる非従属節化は条件節が独立に用いられ、希望を表すようになる現象と、*yathā* の導く様態節が独立に用いられる現象である。また、*Śatapatha-Brah̥mana* において主節なしで独自に主題を表す *yad* 節も非従属節化であると判断される。

## 1. はじめに

サンスクリット語の従属節の中には、*yad*「～と、もし、～のとき」、*yatra*「～のところで」、*yadā*「～のとき」など、*ya-*という語幹をもつ従属接続詞 (*subordinator*) を用いて導かれるものがある。また、サンスクリット語の従属節には、従属節内部で従属接続詞を用いるのみならず、主節にも指示詞を用いて関連させる場合が多いという特徴がある。例えば、(1) のような例が挙げられる<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 本稿は筆者の修士論文の一部の再修正である。修士論文の執筆を含め、小林正人先生から多くのご教示とコメントをいただいております、心より感謝の意を申し上げます。また、本稿の母語話者確認等をしてくださった大山祐亮氏にも感謝したい。さらに、本稿の下敷きとなる修士論文の執筆の際に、多大な助言をくださった長屋尚典先生と、母語話者確認と内容のコメントくださった諸隈夕子氏にお礼を申し上げます。なお、本稿にある問題は全て筆者の責任である。

<sup>2</sup> サンスクリット語のローマ字転写において、補助記号を使用する場合は以下の通りである。マクロン付き母音は長母音、下点付き子音 (<ṣ>等) はそり舌音、<ś>は無声歯茎硬口蓋摩擦音、<ṃ>は閉鎖のない鼻音あるいは直後の子音と同じ調音位置をもつ鼻音(文末では[m])、<ḥ>は直後の子音と同じ調音位置をもつ無声の摩擦音(文末では[h])を表す。また、サンスクリット語には一定の規則による連声がある。語と語の間または複合語を構成する時に起こる連声は外連声と言い、屈折や派生形を作る時には内連声が起こる。本論文中の例文では、子音間の外連声は原則として切られた形、母音間の外連声と内連声は切られていない形で示す。さらに、写本においては「|」「||」という符号(ダング)が用いられており、「/」「//」と転写される。それは中止符と終始符の意味であり、概ね英語の「,」と「.」に相当する。本論文は全てアルファベットに転写したため、「/」「//」に代わって「,」と「.」を用いている。しかし、*Śatapatha-Brah̥mana* においてのみ、写本のダングは必ずしも中止符と終始符を表すものではないため、本論文における文の切れ目は筆者が原文の意味から判断して加えたものである。

- (1) [yó rāyò 'vánir mahán  
REL.PRON.NOM.SG wealth.GEN.SG stream.bed.NOM.SG great.NOM.SG  
supārāḥ sunvatāḥ sákhā,]  
easy.to.be.crossed.NOM.SG soma.presser.GEN.SG comrade.NOM.SG  
**tásmā** índrāya gāyata.  
him.DAT.SG Indra.DAT.SG sing.IMP.2PL  
'He **who** is a great stream-bed of wealth but easy to cross, the comrade of the soma-presser **to him**, to Indra, sing!' (Jamison and Brereton 2014: 94)

(*Ṛg-Veda* 1.4.10)

例文(1)では、関係詞は *ya-*の単数主格男性形の *yó* である。この例文では関係代名詞 *yó* (連声なしの形は *yás*) と指示代名詞 *tásmā* (連声なしの形は *tásmāi*) が相関関係節をなしている。*yó* は関係節における格を標示し、*tásmā* は主節における格を標示している。これが *ya-*による関係節の典型的な構造である。

一方で、サンスクリット語には、相関する指示代名詞を伴った節を伴わずに、関係代名詞をはじめとする従属接続詞に導かれる節が独立したものとして現れる構造もみられる。そのような例には、主節が単に省略されただけのものも存在するが、中には単なる省略ではなく、その従属節自体が独自の意味を帯びているものがある。例えば、次の例文(2)と(3)のようなものが挙げられる。

- (2) **yadi** mām saṃsprśed rāmaḥ sakṛd  
if 1.PER.PRON.ACC.SG get.in.touch.OPT.3.SG Rama.NOM.SG once  
adyālabheta vā.  
now.touch.Ā.OPT.3.SG or  
'If only Rama could touch me or speak to me now just once.' (Pollock 2005: 341)

(*Rāmāyaṇa* 2.58.48)

- (3) **yád** v evá vaisarjināni  
REL.PRON.NOM.SG on.the.other.hand exactly.so Vaisarjina.ACC.PL  
*juhóti.* yajñó vái víṣṇuḥ.  
offer.PRS.3SG sacrifice.NOM.SG indeed Vishnu.NOM.SG  
'And again, why he performs the Vaisargina offerings. Vishnu, forsooth, is the sacrifice.'  
(Eggeling 1885 vol 2:155)

(*Śatapatha-Brahmaṇa* 3.6.3.3)

これらの現象に関する統語的な解釈について、本論文では「非従属節化 (insubordination)」

という概念を利用し、例文(2)や(3)のようなサンスクリット語における従属節が独立して用いられる現象の分析を試みる。

非従属節化とは Evans (2007: 367) によって提案された概念で、「慣習化されている、一見して形式的に従属節のように見えるものの主節用法 ('the conventionalized main clause use of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clauses')」 と定義される。例えば、Narrog (2016: 277) が取り扱った、日本語の「今日行けばいいのに」のような「のに」による構文が非従属節化の例として挙げられる。

## 2. 先行研究および非従属節化の判断基準

サンスクリット語の従属節あるいは関係節それ自体の先行研究は多いが、非従属節化という観点からの研究は存在しない。従属節自体に関する研究としては Speijer (1886)、Delbrück (1888)、Apte (1925) などが挙げられる。個々の文献における従属節の記述としては *R̥g-Veda* に関する Hettrich (1988) の研究や *Śatapatha-Brah̥maṇa* に関する Durkin (1991) の研究が挙げられるが、どちらも Evans (2007) 以前の研究であり、非従属節化には言及していない。また、文中の要素の省略という観点からの先行研究としては Delbrück (1888: 7-11) のほか、古典期サンスクリットにおける省略について記述した Gillon (2010) 等が挙げられるが、複文における主文の省略については言及していない。

Evans (2007: 370) は、一般的な従属節から非従属節化に至る変化の過程には、(1)主節のある従属節構造、(2)主節の省略、(3)省略の慣習化、(4)主文構造への再分析、という四つの段階があると述べている。これらのうち、(3)の省略が慣習化されているかどうかを判断する基準に関して、Evans (2007:372) は、コンテキストを必要とせず独自の意味を持つものであるかどうかであると述べている。また、(4)の主文構造への再分析が起こっているかどうかを判断する基準に関して、Evans (2007:374) は、省略された内容が修復不可能であるかどうかであると述べている。

しかしながら、このうち、主文構造への再分析が起こっているかどうかの判断基準については、疑問の余地がある。なぜなら、Evans (2007) において非従属節化の例として挙げられている例文の中には、省略された内容が必ずしも修復不可能であるとは言えない例が含まれているからである。例えば、Evans (2007:391) では、「僕は行くから」、そして「僕は行きますので」という文が非従属節化の例として挙げられている。Evans の定義では、これら二つの文では主文が修復不可能であることが期待されるが、実際のところ、それぞれの文に対して、「僕は行くから、あなたは行かなくて大丈夫」、「僕は行くから、君も来い」と「僕は行きますので、明日家にいません」、「僕は行きますので、さようなら」のように主文の修復が可能である。

従って、主文への再分析が起こっているかどうかの基準は、主文の修復が不可能であるというよりも、むしろ Narrog (2016) が主張した「閉じた非従属節化 (closed insubordination)」の定義のように、主文の修復方法が特定の形に限られるということであると考えられる<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> Narrog は「閉じた非従属節化」に対して、主文の復元方法が限定されていないものを「開いた非従属節

例えば、Narrog (2016: 277) が例として挙げた「今日行けばいいのに」という文は、「今日行けばいいのに、行かないなんて残念だ(あるいは、何故行かないのか)」というような形に主文の修復方法が限定されている。

以上のことから、本論文では Evans (2007) の定義を修正して、非従属節化とは、(i) 主文を伴わない従属節である、(ii) 本来存在していたと考えられる主文の修復方法がある特定の形に限られる、(iii) 独立して現れる従属節に省略としては説明できないようなその構文独自の意味が存在する、という特徴を持つものであると定義する。

### 3. 叙事詩サンスクリットとサンスクリット劇における非従属節化<sup>4</sup>

本節では、叙事詩サンスクリットとサンスクリット劇における非従属節化と思われる用例を検討する。その際、前節で提示した、主文の修復方法が特定の形に限られ、単独で用いられる従属節に独自の意味が存在するかどうか、という点に注目する。

#### 3.1. 条件節

叙事詩サンスクリットとサンスクリット劇における非従属節化と思われる例として第一に挙げられるのは、*yadi* 「もし」のような語に導かれた条件節のみが、独立して用いられるものである。例えば、*Mudrārākṣasa* のような戯曲や叙事詩 *Rāmāyaṇa* には以下の例文(4)、(5)、(6)のようなものがある<sup>5</sup>。

(4) *yadi śrotuṃ jānantam labhe.*

if listen.INF know.PRES.PTCP.ACC obtain.PRS.1SG

「聞くことを知るものを得たならばなあ (文脈：スパイが雇い主の家に報告にやってきたものの、門番である雇い主の弟子が話に取り合わず、報告に行けずに家の門前で言い争いをしている最中のスパイの台詞)。」(筆者訳)

化 (open insubordination)」と定義している。しかし、これは省略との区別がつけられないため、非従属節化とはいえないと思われる。

<sup>4</sup> サンスクリット語はヴェーダ語、叙事詩サンスクリット語、古典サンスクリット語という三つの区分に分けられる。ヴェーダ語は *Ṛg-Veda* や *Śatapatha-Brahmaṇa* のようなヴェーダ文献の言語であり、叙事詩サンスクリットは *Mahābhārata* と *Rāmāyaṇa* の二つの叙事詩の言語であり、古典サンスクリットは紀元前 5 世紀頃の文法家パーニニの記述が規範となって固定化されたものである。サンスクリット劇で用いられるサンスクリットは古典サンスクリットである。本研究では GRETIL (<http://gretil.sub.uni-goettingen.de>) の電子テキストを利用しているが、*Abhijñānaśākuntala* の電子テキストは Kāle (ed.) (1898) を底本に入力していると思われる。*Mudrārākṣasa* は Mishra (1976) を底本としている。

<sup>5</sup> サンスクリット劇においては、一部の登場人物の台詞は中期インド・アーリア語で書かれている。そのような台詞の中にも非従属節化と思しき例は存在する。以下にそのような例を挙げる。

(i) *jai mama vi kkhu addham accaṇa.phalassa*  
if my.GEN.SG as.well indeed half.NOM.SG homage.fruit.GEN.SG

「私にもお祈りの功德の半分があったらなあ。(筆者訳) (*Abhijñānaśākuntala* 第 6 幕 6.2)

(ii) *jai evvam vi nāma vissamaṃ laheam*  
if in.this.way also named rest.ACC.SG obtain.Ā.OPT.1.SG

「もし、休息を得られればなあ (文脈：王様の狩猟に付き合っているヴィドゥーシャカが疲れ果てたところに、王様はシャクンタラーに出会った。王様がシャクンタラーのことばかり考えている時のヴィドゥーシャカの台詞)。」(筆者訳) (*Abhijñānaśākuntala* 第 2 幕 2.1)

(Mudrārākṣasa 第1幕)

- (5) **atha** sma nagare rāmaś  
 if PTCL street.LOC.SG Rama.NOM.SG  
 caran bhaiṣṣaṃ gr̥he vaset.  
 do.PRS.PTCP.NOM.SG beg.ACC.SG home.LOC.SG live.OPT.3.SG  
 ‘If only Rama could have lived at home though it meant his begging in the city streets!’ (Pollock 2005: 233)

(Rāmāyaṇa 2.38.4)

- (6) **yadi** māṃ saṃspr̥śed rāmaḥ sakṛd  
 if 1.PER.PRON.ACC.SG get.in.touch.OPT.3.SG Rama.NOM.SG once  
 adyālabheta vā. na tan  
 now.touch.Ā.OPT.3.SG or not DEM.PRON.NOM.SG  
 me sadṛśaṃ devi yan  
 1.PER.PRON.DAT.SG like.NOM.SG lady.VOC.SG REL.PRON.NOM.SG  
 mayā rāghave kṛtam  
 1.PER.PRON.I.SG Raghava.LOC.SG do.PASS.PTCP.NOM.SG  
 ‘If only Rama could touch me or speak to me now just once.  
 How unlike me it was, my lady, to do what I did to Raghava.’ (Pollock 2005: 341)

(Rāmāyaṇa 2.58.48)

例文中で従属節を導く *yadi* および *atha* は本来、条件節を導くという以上の役割はもたず、話者の希望を表すという機能は存在しない。すなわち、話者の希望を表すという意味は従属節が独立して用いられる用法が獲得したものであり、もはや単なる主文の省略とは分析できなくなっている。従って、上に挙げたような文は Evans の提示した非従属節化の一例であると考えられる。

Evans (2007: 387) は「広く見られる非従属節化は、間接的行為や対人コントロールの機能を持つ。このような非従属節化は命令法や、許容・警告・脅し、また、より穏やかなヒント・提案といった対人コントロール機能を持つ」、そして、「この機能は主に願望の述語の省略、結果構文の省略、不定形の独立使用、警告と注意、依頼と丁寧な言い方といった形式で表されることが多い」と述べている。サンスクリット劇に見られる非従属節化の例は、話者の「あることが起こってほしい」という願望を表す役割を持ち、結果構文の省略という形式で表されている。

### 3.2. 様態節

また、劇の登場人物の台詞には、*yathā* 「～のように」に導かれる従属節が独立して用いら

れた文もみられる。例としては以下のような文が挙げられる。<sup>6</sup>

- (7) **yathāha**            **bhavatī**  
 as.say.PRS.3SG    your.honor.NOM.SG  
 「貴方が仰る通りに。」(筆者訳)

(Mattavilasaprahasana)

- (8) **yathā**    **gurubhyo**                            **rocate.**  
 as    venerable.person.DAT.PL    be.pleased.Ā.PRES.3.SG  
 「尊師がよいと思うように、取り計らわれよ。」(辻訳)  
 「(王の台詞) 貴方の満足するように。」(筆者訳)

(Abhijñānaśākuntala 第5幕 5.29)

- (9) **yathā**    **bhavān**            **manyate**  
 as    you.SG.NOM    consider.Ā.PRES.3SG  
 「(王の台詞) 何卒よろしきように」(辻訳)

(Abhijñānaśākuntala 第7幕 7.12)

例文(8)を辻 (1977) は「尊師がよいと思うように、取り計らわれよ。」と訳しているが、実際のところ、原文においては「尊師がよいと思うように」としか述べられておらず、「取り計らわれよ」という動詞は訳の過程で補われたものである。

このような *yathā* の導く従属節のみからなる文は、「取り計らうべきである」という形に主文の修復可能性が固定されており、Evans (2007: 387) のいう「より穏やかなヒント・提案」という機能を獲得している。従って、このような *yathā* 節が独立して用いられる文は非従属節化の一例であると考えられる。

#### 4. Śatapatha-Brāhmaṇa に見られる非従属節化

紀元前 7-6 世紀頃 (Witzel 1995:106) に成立した白ヤジュル・ヴェーダの釈義書の一つである *Śatapatha-Brāhmaṇa*<sup>7</sup> においても、従属節が独立に用いられる現象が見られる。例えば、以下のような例がある。

<sup>6</sup> 原文は中期インド・アーリア語のプラークリットであるが、サンスクリット劇には以下の(iii)と(iv)のような例も存在する。

(iii) **jaha**    **āvutte**                            **bhaṇādi.**  
 as    a.sister's.husband.NOM.SG    speak.PRES.3.SG  
 「(sūcakaの台詞)閣下のご命令のままに。」(辻訳) (*Abhijñānaśākuntala* 第6幕 6.1)

(iv) **jaha**    **bhahamuho**                            **bhaṇādi.**  
 as    gentle.sir.NOM.SG    speak.PRES.3.SG  
 「(苦行女のセリフ)いかにも仰せの通り」(辻訳) (*Abhijñānaśākuntala* 第7幕 7.20)

<sup>7</sup> *Śatapatha-Brāhmaṇa* には *Mādhyandina* 伝本(ŚBM)と *Kāṇva* 伝本の2種類が存在するが、本論文で引用した例は前者のものである。なお、本論文における引用箇所は Weber (ed.) (1855)を底本としている。

- (10) **yád** v evaitám áhutim  
 REL.PRON.NOM.SG on.the.other.hand just.so.this.ACC.SG oblation.ACC.SG  
 juhóti. etám evaitád yajñásya  
 offer.PRS.3SG this.ACC.SG just.so.thus sacrifice.GEN.SG  
 rásam abhiprástrñite.  
 sap.ACC.SG pour.out.PRS.3SG  
 ‘And again, why he offers this oblation: he thereby pours out (ghee) towards that sap of the sacrifice.’ (Eggeling 1885 vol 2: 234)

(ŚBM 3.9.3.24)

- (11) átha **yád** átra bahiṣpavamānéna  
 then REL.PRON.NOM.SG here Bahiṣpavamana.I.SG  
 stuvaté. átra há vá asāv  
 praise.PRS.3PL here assuredly indeed that.NOM.SG  
 ágra ādityá āsá.  
 foremost.LOC.SG sun.NOM.SG be.PERF.3SG  
 ‘And as to why they chant the Bahiṣpavamana here (near the catvala). In the beginning, forsooth, yonder sun was here on earth.’ (Eggeling 1885 vol 2: 309)

(ŚBM 4.2.5.9)

- (12) átha **yád** aṣṭākapālo bhāvati.  
 then REL.PRON.NOM.SG eight.potsherds.NOM.SG be.PRS.3SG  
 aṣṭākṣarā vái gāyatrī.  
 eight.syllables.NOM.SG indeed Gayatri.NOM.SG  
 gāyatrī vá iyám pṛthivy.  
 Gayatri.NOM.SG indeed this.NOM.SG earth.NOM.SG  
 ‘And as to why it is a (cake) on eight potsherds. – The Gayatri consists of eight syllables, and this earth is gayatri.’ (Eggeling 1885 vol 3: 44)

(ŚBM 5.2.3.5)

- (13) sá **yád** āgnāvaiṣṇavāḥ  
 and REL.PRON.NOM.SG of.Agni.and.Vishnu.NOM.SG  
 ékādaśakapālaḥ puroḍāśo bhāvaty. agnir  
 of.eleven.potsherds.NOM.SG pancake.NOM.SG be.PRS.3SG agni.NOM.SG  
 vái dātā. vaiṣṇavāḥ púruṣās.  
 indeed giver.NOM.SG Vishnu.NOM.PL man.NOM.PL  
 ‘Now as to why there is that cake on eleven potsherds for Agni and Vishnu; Agni is the giver, and

men are Vishnu's.' (Eggeling 1885 vol 3: 54)

(ŚBM 5.2.5.2)

(14) *yád* v evá cáturviṃśatiḥ.  
 REL.PRON.NOM.SG on.the.other.hand just.so twenty.four.NOM.SG  
*cá*turviṃśaty.akṣarā *vái* *gā*yatrí. *gā*yatrò  
 twenty.four.syllables.NOM.SG indeed Gayatri.NOM.SG Gayatra.NOM.SG  
 'gnir.  
 Agni.NOM.SG

'And again why there are twenty-four, – the Gayatri consists of twenty-four syllables, and Agni is Gayatra.' (Eggeling 1885 vol 3: 167)

(ŚBM 6.2.1.22)

以上に挙げたような、*yád* に導かれる従属節が独立して現れる例が非従属節化と判断される根拠としては、以下の三つが挙げられる。

直後の文に新しい焦点(focus)を提示する *vái* がくる場合がある。*vái* は文の二番目の位置に現れるのが一般的であるため、その直前の語から文が始まっていると判断する根拠となる。Kobayashi (2009) は *vái* が presentational focus であり、新情報を提示する文をマークすると主張している。Delbrück (1888: 482-484) によれば、サンスクリット語において *vái* は新情報を提示する文に現れるのが典型的な用法である。すなわち、*vái* が現れるということは (*ha* のような接語を除いて計算して) その直前の語から新しい文が始まっているということの意味する。

ŚBM における主節なしに現れる *yád* 節は、「～について (述べよう)」という形に主文の修復可能性が固定されている。さらに、本来の *yád* 節による従属節とは異なり、主題の提示という独自の意味を獲得している。したがって、非従属節化の基準を満たしていると考えられる。この文はすでに述べた祭式行為の詳細を説明する際に用いられる。例えば、(14)を含む節全体は以下のように解釈することができる。「24 音節であることについて(題目)。ガーヤトリーは 24 音節であるのだ(命題の提示)。アグニはガーヤトラである。アグニがどれほど偉大であるのかというのと同じ程度に、そして彼の規模がどれほど大きいのかということと同じ程度にそれを燃やすということになる。」

*yád* と連声上の違いだけの *yát* との合計で、しかも節の冒頭にくる場合の用例 413 例中、本論文で論じている主節なしに用いられる例は 265 例を占めるため、用例数も多く、少なくとも ŚBM の範囲内では生産的な構文であり、慣習化されていると思われる。

## 5. 結論

本論文では、非従属節化とは、(i) 主文を伴わない従属節である、(ii) 本来存在していたと考えられる主文の修復方法がある特定の形に限られる、(iii) 独立して現れる従属節に省略



としては説明できないようなその構文独自の意味が存在する、という特徴を持つものであると定義したうえで、サンスクリット語の叙事詩や劇、そして釈義書 *Śatapatha-Brāhmaṇa* における、主文なしに独立した文として用いられる従属節が非従属節化であるかどうかを検討した。その結果、叙事詩やサンスクリット劇における *atha, yadi, yathā* によって導かれる従属節が独立して用いられる文、および *Śatapatha-Brāhmaṇa* における *yād* に導かれる従属節が独立して用いられる文は非従属節化の例であると判断できるということがわかった。叙事詩やサンスクリット劇における非従属節化は、話者の「あることが起こってほしい」という願望を表す役割を持つようになる条件節と、「取り計らうべきである」という形に主文の修復可能性が固定されており、Evans (2007: 387) のいう「より穏やかなヒント・提案」という機能を獲得している *yathā* の様態節である。*Śatapatha-Brāhmaṇa* における非従属節化は、「～について(述べよう)」という形に主文の修復可能性が固定されており、主題の提示という機能を獲得している。

### 略語一覧

Ā: Ātmanepada, middle voice; ABS: absolute; ACC: accusative case; DAT: dative case; DEM. PRON: demonstrative pronoun; GEN: genitive case; I: instrumental case; IMP: imperative; INF: infinitive; LOC: locative case; NOM: nominative case; PER. PRON: Personal Pronoun; PL: plural number; PASS: passive; PTCP: participle; PTCL: particle; PRS: present; REL.PRON: relative pronoun; ŚBM: Śatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina recension; SG: single; VOC: vocative.

### 参考文献

- Apte, Vaman Shivaram (1925) *The Student's Guide to Sanskrit Composition: being a treatise on Sanskrit syntax, for the use of schools and colleges*. 9th edition. Girgaon, Bombay: The Standard Publishing Company.
- Cristofaro, Sonia (2016) *Routes to insubordination. A cross-linguistic perspective*. Nicholas Evans, Honoré Watanabe edited. *Insubordination*. Amsterdam: John Benjamins.
- Delbrück, Berthold (1888) *Altindische Syntax*. Halle: Waisenhaus.
- Durkin, Desmond (1991) *Konditionalsätze im Śatapathabrāhmaṇa*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Eggeling, Julius (trans.) (1885) *The Śatapatha-Brāhmaṇa: according to the text of the Mādhyandina school*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, Nicholas (2007) *Insubordination and its uses*. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finitenes: retical and empirical foundations*, 366-431. Oxford: Oxford University Press.
- Gillon, Brendan S. (2010) *Linguistic investigations into ellipsis in Classical Sanskrit*. Girish Nath Jha (ed.) *Sanskrit Computational Linguistics. 4th international symposium, New Delhi, India, December 10-12, 2010: proceedings*. Berlin: Springer.
- Hettrich, Heinrich (1988) *Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen*. Berlin; New York: W. de Gruyter.

- Kale (1898) (ninth ed. 1961) *The Abhijñānaśākuntala* of Kālidasa. Bombay.
- Kobayashi, Masato (2009) Information structure and the particles *vai* and *eva* in Vedic prose. Klein, Jared and Kazuhiko Yoshida (eds.), *Indic across the Millennia: from the Rīgveda to modern Indo-Aryan: 14th World Sanskrit Conference, Kyoto, Japan, September 1st-5th, 2009, proceedings of the Linguistic Section.*, 2013. Bremen: Hempen. 77-92.
- Mithun, Marianne (2008) The extension of dependency beyond the sentence. *Language* 84 (1): 69-119.
- Narrog, Heiko (2016) Insubordination in Japanese diachronically. Nicholas Evans, Honoré Watanabe edited. *Insubordination*, 246-281. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Pollock, Sheldon I. (2005) *Rāmāyaṇa Book Two Ayodhyā* by Valmīki. New York: New York University Press.
- Speijer, Jacob, Samuel (1886) *Sanskrit Syntax*. Leyden: Brill.
- Weber, Albrecht (1964) (ed.) *The Śatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çākhā* with extracts from the commentaries of Sāyaṇa, Harisvāmin and Dvivedānga, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- Mishra, Jagdish Chandra (1976) *Mudrārākṣasa*. Varanasi: Chowkhamba Vidyabhawan.
- 辻直四郎 (1977) 『シャクンタラー姫』(岩波文庫) 東京 : 岩波書店.

## The Insubordination in Sanskrit

ZHANG Qianqian

zhangqianqian1011@gmail.com

Keywords: Sanskrit, syntax, insubordination

### Abstract

In this paper, we discuss the phenomenon of insubordination in Sanskrit. Evans (2007: 367) defined insubordination as ‘the conventionalized main clause use of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clauses.’ We argued that the phenomenon of insubordination can also be found in Epic Sanskrit, Sanskrit drama and the Vedic text *Śatapatha-Brāhmaṇa*. Moreover, the kind of insubordination sentences we found in Epic Sanskrit and Sanskrit drama are conditional clauses, which are used independently to mean the wish of the speaker, and the manner adverb clauses introduced by *yathā* ‘as’. In *Śatapatha-Brāhmaṇa* we can also find many instances of *yád* clauses used independently to express the topic of the section, which seem to be insubordination as defined by Evans (2007: 367).